

特別支援学校教育実習生の学びと成長 その 1

—教育実習における学生の学びの本質とは—

○岡田 信吾 岡 綾子 津島 靖子

（就実大学教育学部）

KEY WORD: 特別支援学校教育実習 学び テキストマイニング

【目的】

教育実習は、教員養成課程の中で大きな位置づけを占める学びとして実施されてきた。しかしながら、その教育課程の取り扱いおよび学びの本質について、定まった見解はなく学問的な基礎研究も存在していない（堀田ら，2019）。特別支援学校教育実習についての先行研究から、実習参加後に学生は子どもとの関わりに関して満足感を得ることを報告されている（池田ら，201；今野ら，2016）。

特別支援学校教育実習において、学生自身が特別支援学校の卒業生であるケースは稀である。つまり、学生は特別支援学校教育実習で初めて一定期間特別支援学校に関わることになるのである。そのため、この実習が学生にとって、特別支援学校教員となるための大切な経験となる。

現在のコロナウイルス感染症の拡大下において、特別支援学校における教育実習が事実上実施できないケースも生じつつある。文部科学省は、このような場合に対応し、教育実習の代替的な措置として学内での実習に代わる学びを認めている（文部科学省，2020）。この代替的な学びを考える上で、教育実習の代替となり得る、学びの本質とは何であるか明らかとする必要が生じた。そこで、本研究においては特別支援学校教育実習に参加した学生の振り返りをもとに、特別支援学校教育実習での学生の満足感や学びの本質を確認したいと考えた。

【方法】

20XX 年に実施された特別支援学校教育実習に参加した学生 39 名（3，4 年生）を対象として、特別支援教育実習の振り返りを記述させた。記述は、「主指導者としての授業参加」、「副指導者としての授業参加」、「自由時間の子どもとの関わり」、「日常生活の指導の関わり」、「担任教師との関わり」、「実習全体の不満感」、「実習全体の満足感」、「実習日誌、指導案の作成」の 8 項目から構成し、実施した。記述は、全員実施することとしたが、研究参加については自由意志とし設問において研究使用の同意を得るようにした。参加した全ての学生から研究指導の同意を得た。分析は、KH coder3.

Beta. 03（樋口，2020）を利用したテキストマイニングによ

り実施した。なお、テキストマイニングの実施前に児童と生徒や教師と先生のように同じ意味で使用されていると見なされる語を同一の語に置換し、研究授業、日常生活の指導のように 1 つの語として取り扱うことが文脈上適切な語については強制抽出し 1 つの語として取り扱われるようにした。

【結果】

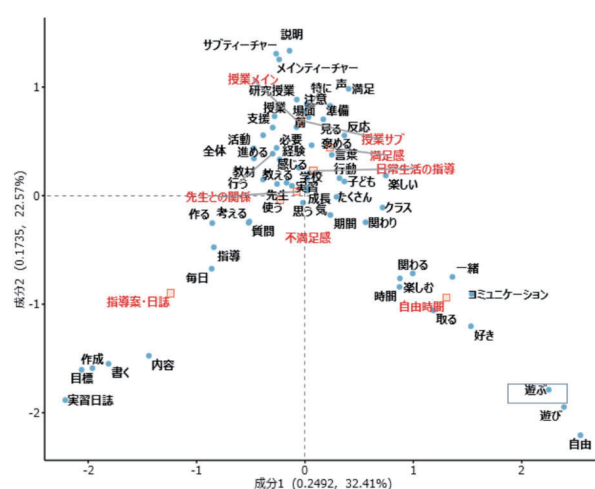


図 1 対応分析の結果

記述項目と抽出語の対応分析の結果から、「実習全体の満足感」は「主指導者としての授業参加」、「副指導者としての授業参加」および「日常生活の指導の関わり」との関連が深いことが示された。次に、「満足」という抽出語に注目した記述では、子どもの実態把握を前提として、授業で楽しむ姿が見られたことや、短期間でも成長が見られたこと、相互にコミュニケーションがとれるようになったことなど、授業を中心とした子どもとの関わりに満足を得たという記述が多く見られた。また、教員からの指導や助言にも満足を感じたことも示された。

【考察】

テキストマイニングの結果から、特別支援学校教育実習において、学生は授業と日常生活の指導において満足を得ているという示唆が得られた。さらに、テキストの詳細な読み込みからは、子どもの実態把握とともに担当教員からの指導・助言に対して満足感が示された。

（文献については、本発表において示す）